「まさか別の部屋を用意できないなんて」
「しょーがないわねぇ……ふふふ」
「なにそのいやらしい笑い方……中断――」
「しませんよ？」
何言ってるんですか？ とでも言いたげな表情で首を傾げた樹は微笑を浮かべたまま天乃へと近づき、ギブスで固定された左腕にやや苦労しながら少しばかり動きにくそうに天乃の右手側に膝をついて乗り上げると、ゆっくりと天乃へと身を寄せていく。
（久遠先輩とこうして一緒になれるの……ずっと楽しみにしてた）
そこにはどこか怨念めいたものを感じさえするが、当然、樹は天乃に恨みなど抱いてはいない。ただただ、待たされ続けた渇望だけがそこにあるだけだ。
「ずっと、話を聞くだけだったんです。ずっと、想像するだけだったんです……」
純度の高い好意で作られた声は少しだけ寂しさに震えていて、樹がどれほど前に求めていたのかをよくよく、知らしめる。
「と、言うわけで。夏凛達にはあたし達が味わった悶々とした気分を味わって頂きたいと思いまして」
にやりと笑う風は樹とは逆の左手側を位置取って、身を寄せる。カーテンはすでに閉め切られており、周りの誰からも見られることはないが、声は聞こえてしまう。だから、我慢しないと……と息を飲む天乃の唇に、風はゆったりと唇を重ねる。押し付けるだけ。触れるだけ。みんなと共通の触れ合い。これが、やはり天乃にとって、みんなにとってのファーストキス
「私も」
樹も同じように唇を重ねる。風よりも薄く柔らかい未発達を感じさせる幼さを残した肉感。小さな唇は離れてすぐに重なって……離れていくにつれて樹の顔の全体像が視界に入り込んでいく。初めのキスは、軽く。それは誰が言い出したわけではないし、決められたものでもないが、樹も風もそれが良いと思ったのだ。後々激しくなっていくだろう、淫らになっていくだろう。そこはもう無礼講。ただ一心不乱に愛を注ぎ、愛を貪る。愛淫の宴。
（でも、今はまだ始まってすらいないから）
しかし、始まりから礼を欠くわけにはいかない。食事の前にいただきます。と口にするように、優しいキスは始まりであり、礼儀であり――感謝
「ちょっと、慣れてない？」
「どれだけ想像したと、焦らされたと……それを埋めるために、あたし達がどうしたと」
風は恨み言のように言いながらゆっくりと左手を天乃の頬に添える。いつも使うのは右手だが今はもう動かない……けれど、その不快感も嫌悪感もどこにもない。それはこの瞬間を勝ち取るものだったのだから。それを合図のように目を瞑った天乃の唇に重ねる。始まりより少しだけ長く。唇の隙間から潤いが溢れていくのを気にも留めず、自分と天乃の唇を潤わせていく

「っ……」
「さすが天乃、慣れてる」
「でも、二人から同時にされるのは東郷先輩と友奈さん以来……ですよね」
樹は最近オドオドとした態度を見せることはなくなってきていたのだが、ここではより落ち着いた様子を見せていた。それは風よりも、天乃よりも、どこか行為に長けた雰囲気を感じさせる。もちろん、経験は風と同じく……いや、それ以上に少ないだろう。だからこそ、樹は未熟な経験を補えるようにと知識を付けることにしたのだ。
（強引なえっちじゃないから……相手のことを、ちゃんと、久遠先輩のことを、ちゃんと……）
樹の小さな手が天乃の右手をなぞる。目に見えないほどの薄い産毛を掠める程度の限りなく近く遠い間隔。擽られるよりもくすぐったさともどかしさを感じさせる樹の指先は天乃の指と指の隙間を埋めるように握ると、そうっと持ち上げて
「っん！」
樹の舌がチロリと天乃の指を舐める。まずは人差し指の先、腹の部分を舌先で味見して爪と指の隙間を下唇に押し当てて上唇で爪を拭う。二度、三度。それを繰り返しながら、覗かせた舌先で爪の隙間に潤いをしみこませて、ぱくりと……第二間接の辺りまでを咥え込んでからキャンディを舐めるような子供じみたものではなく、艶かしさに包まれた大人びた雰囲気を吐き出すようにちゅるりと抜く
「っ……なっ」
「ん……んちゅ……」
「い、いっっ……」
「ぁむ……ふ……」
指先のくすぐったさが引けば艶の乾く寂しさが襲う。しかしそれ以上の恥ずかしさを感じてしまう。
（なんで、なん……ただ、指を……）
そう。ただ指を舐められているだけなのに、天乃は冷えるよりも体が熱を持っていくのを感じていた。ただ指をなめるという行為ではあるが、そこには樹の心地よくさせたいという想いが強く込められている。子供が指先に付いたクリームをなめとるのとはわけが違う。みだらな行為の一つとして行うのだ。
（久遠先輩、少し赤くなってる……可愛いなぁ）
天乃の手から逸れないようにと注視は避けて一瞥した樹は、少しだけ口を開いて、ぬるぬると浸った天乃の指にふっと息を吹きかける
「っ！」
樹の唾液に塗れた指先を撫でる吐息は妙にくすぐったく敏感に感じて、天乃は思わず小さな声を漏らす。ただ指を舐められて息を吹きかけられただけなのに。汗に濡れた体に吹く風のようで……少しずつ、天乃の指先から体の中へと樹の想いが沁み込んでいく

そして、意識がその指に集中している隙間を縫って、今度は風が動く。
（樹……知らない間にどんどん知識付けちゃって……）
東郷もそうだが人より劣っている部分があると思っている樹は、誰もが手を出せていない部分、スタート地点が同じ部分のことに関しては少しでも先でありたいと思ったのかもしれない。あるいは、誰よりも―素人よりも―未熟で教科書通りの知識しかない天乃の為に、自分がその関連の知識を得ようと努力したのかもしれない。大切な妹の成長を複雑な心情で、しかし喜ばしく思う風は、自分がこの場を乱すことはないようにと、天乃の頬に優しく触れる。
「風……？」
ほんの少しだけ、自分を見てと。自分を感じてと。ここにいるのは樹だけではないのだと、行為の中に犬吠埼風の想いを織り交ぜていくために――キスをする。
「んっ……っ」
「っは……んっ、んく……」
一瞬離れて、また重なる。最初の挨拶とは違い愛を紡ぐための接吻だった。それはいつも夏凛達としている行為だったが、キスを何度も経験し、慣れている天乃にとっても指を玩ばれながらのキスなど未経験で、手先からの刺激と唇の感触に神経は右往左往して惑い、迷い、脆くなった隙を突くように風の舌が口腔へと入り込む。
（二人……っ）
意図せず零れるいやらしい音。潤いに満ち満ちて溢れたものは口元から伝い落ち、風の指が拭う。友奈と東郷という息の合ったペアとも経験はある。だが、この二人はそれとはまた違っていた。人が違うというだけではない違い、知識の差という違いでもない。親友であっても他人である二人と、姉妹という血の繋がった二人という違いだ。互いに意識しているのかは天乃にも定かではない。だが、樹は風の、風は樹の行為を決して阻まないのだ……溢れ出て、沁み込む好意と溶け合って決して不協和音とはならないのだ。犬吠埼姉妹という、二人で一つの大きない愛情として天乃を包み込んでいく。
「は……ふ……んっ」
ゆっくりと離れた風が余韻に浸るように自分の口を拭って息を呑む中、奪われた。という言葉に違いなくキスされた天乃の開いた唇に影が差し込む。
「っぁ……や、い、樹……っ」
思わず抵抗の言葉が出てしまう。しかし、まだ風の感触が中途半端に残る舌、言葉も覚束無い状況の天乃に樹は容赦なく近付くと、手を握りながら唇を重ね……ぬちゅりと音を立てながら舌を絡める。
「っふぁ……んっ」
巻き付くような舌の動き。表を撫で、裏を削り、芯を絞る強引で大胆なキス。しかしながら、触れる唇はけして押しつぶすような圧迫感は無く、柔らかな肉質のクッションを重ねただけの重みで。

「んっ……っふ……ぁっ」
「ん……っは……ちゅ」
潤いも感覚も吸い上げられ、奪われて。果てには魂までも奪われてしまいそうにさえ思う。けれど、やめたいと思えない魅惑的な甘さが天乃の拒絶を阻害する。
（樹じゃないみたい……）
待ち望み蓄えられた樹の情欲はそれほどに洗練されていたのだ。唇を重ね、舌を絡めていただけでも、それが直接身体の芯に触れたように火照らせて流れ込んでくる。待っていたと、大好きなのだと。愛欲の入り混じった唾液を飲み込んだ瞬間、プツリ……と、胸元で音がしたかと思えば連続で鳴る。
「んぇ……んっ……んんっ」
目を向ければ乳房を含んだ白いインナーが露わになっていくのが見えたが、すぐに意識は樹へと抱き込まれてしまった。樹が気を逸らさないでというように深く強いキスをする一方で、ボタンを弾くように外していく風の手に迷いはなかった。天乃の小さな体にそぐわない大きさだった乳房は寝間着の窮屈なスペースから解放された喜びをあらわにするように、ボタン一つを外すたびに揺れて……妊娠したことによって大きさが増しているようにさえ見えた。
（きれいな形……触って良し、見て良し。だとしたら……）
ごくり。と喉を鳴らした風は天乃へと目を向けていやらしく笑みを浮かべる
「吸えば母乳でも出てくると思う？」
「ま、まだ早っ――んっ」
「少しは喋らせてあげたら？」
「私がしてるんじゃないよ。誘われてるんだよ。逆らえないんだよ」
いやいや。と、風は内心否定しながら、樹に深く抉られていく天乃の事を見つめる。もがこうとしているのか、握られていない左手は握ろうとしては開いてを繰り返しぴくぴくと震えて、天乃の口からは樹による蹂躙の足音がぴちゃりぴちゃりと響く。聴覚器官を持余すことなく掻っ攫っていき、感覚的渇きに飢えた喉がごくりと鳴る。そして……
「っは……」
「んっ……はっぁ……ぅ」
妹の口元から伝う糸の先、潤いきった艶やかな唇は微かに開いて湿った吐息を零す。ぼんやりとしているのが分かる瞳は誰かを求めて彷徨い風の視線に巻き付いてくる。それはまるで誘うような艶かしさのある視線だった。
「あ……」
だから、思った。樹の言う「しているのではなく誘われて逆らえない」それがけして世迷言などではないのだと。
「っふ……んちゅ……」
「んっ、っはっ……んくっ……」

気付けば、唇を重ねていた。伸ばされた手に手を差し伸べるがごとく舌を絡めていた。熱烈な接吻の熱気が溢れて、誰のものかもわからない潤いが唇を、喉を、感覚を満たして――駆け抜けていく。

（甘い……なんか、こう……うまく言えないけど）

樹との間接キスの経験など数えられないほどに行ってきたが、天乃を介する間接キスの味は何物にも模倣することのできない特別な感覚だった。はしたないことだと分かっていても、唇の間で立ち往生する誰かの味を啜ってしまう。品のない音などどうでもよかった。その快感に待ってという言葉は届かずに逃げていく、抜け落ちていく。まるでそこには何も無かったかのように。だから、また貪るのだ。空気を取り込んですぐにそれが体を巡るよりも早く。天乃の唇の感触、天乃の清廉な匂い、淫らな味わいを巡らせるために。

「はぁっはっ……はぁ……んくっ……」

「はぁ……はぁ……」

ポタポタと涎が零れる風は自分が獣のように思えて慌てて口元を拭う。溜まりに溜まったものを解放するのだから致し方ないという考えはあるのだが、それにしても過激になりすぎてはいないだろうか。と自制心が何とか働く。見つめる先の天乃は荒い吐息のままいやらしく胸を上下させる。手も足も投げ出したまま料理されるのを待つかのような姿。額には汗が浮かび、髪が少しだけ張り付いていて、妖艶さを増していく。ある意味で芸術……そう思い見惚れてしまう風をよそに、樹はこくりと生唾を飲んで、天乃のインナーの裾を摘まむ。

「久遠先輩、脱がしますね」

「んっ……ぇ？」

自分がなにをされようとしているのか頭が追いついていない間の抜けた声を零した天乃を横目に、樹はインナーの裾を捲ると、視線をものともしない強固な壁に仕掛けられた罠が姿を見せる。歴戦の勇士、憧れ、恋焦がれた小さいはずの大きな背中が幻想ではなかったことを証明する引き締まった腹部、その中央で目を奪う小さな臍の窪み。樹たちがまず最初に感じたのは、触れたいという自分の欲望だった。腹筋の固さを感じたい、臍の窪みに指を沈めてみたい。そんな情欲。

「お姉ちゃん、どうする？」

「どうするって？」

「お臍、私が先で良い？」

どうするかを伺う樹は低姿勢だが、風には自分が見上げている立場のような感覚を覚えて、頷く。純粋に見たかったのだ、自分よりも知識を蓄えているであろう樹の愛で方を。ベッドを賭けた勝敗などもはや関係ない。愛を知った妹の成長、そこに懸ける思いの強さをただ純粋に、姉としてみてみたいと思った。

「キス、先にしたし」

「えへへっ、ありがと。お姉ちゃん」

可愛らしい純粋な笑みを浮かべた樹は、「久遠先輩」と甘えるような声で呼び、右手で腹部を擦りながら唇を重ねてちゅるちゅると啜り、空気の弾ける淫猥な音を響かせて離れると、口に含んだ自分と天乃の唾液を天乃の臍に滴らせた

「っ……！」

ねっとりとした生温い液体が腹部に滴り落ちて、緩やかに臍の窪みへと流れ込む感覚に天乃の体は微かにビクつく。収まりきらなかった分が脇腹に流れていくが、樹は気にせずに舌を伸ばし、ぺろりと臍を舐める

「んっ……っ……ふっ……！」

初めに滴らせたことで身構えたからこそ天乃の腹部はその感覚を固く受け止めてしまう。舐められている。味わわれている。その感覚が鮮明に脳に伝わってしまう。本来は他の侵入を寄せ付けない窪みへの侵略。奥の奥、秘めたる部分。子宮。そこまで届いているかのような心地よさに下腹部がじんわりと欲求を滲ませて、無意識に唾液の溜まった唇に風の唇が重なる。ここにいるのは樹だけではないのだ。

「んっ、っふ……ぁっ」

「んくっ……ん……ちゅ……」

「っはっ……はぁっ……んっ——んんっ！」

樹の舌に束ねられた神経が風の唇に解されていくと、つつーっと腹を割くような感覚が走り、天乃思わず体を震わせた。

（や、休ませてくれないの……っ？）

不意を襲った感覚、舌を覗かせて悪戯っぽく微笑む樹。空気に触れて乾いていく腹部がなにをされたのかを示していたが、それに対する反応をする余裕など与えては貰えない。呼吸を終えればまた風の唇が唇を塞ぎ、揉むように押し込まれては唇に挟まれて甘噛みされ、閉じれなくなれば舌が割り込んでくる。粘着質な水の音がどこからとも無く響き、風のつつくような舌の触れ合いにはもう天乃の口腔は心を許し自分から求めてしまっていて、その間も腹部を這う樹の舌は容赦なく天乃の身体を堪能し、魔の手は甘い実りを秘めた膨らみを捲る。

「……っは」

「綺麗な膨らみですね」

「はぁっ……は……ふぅ……」

答える余裕など無く荒々しい吐息を零す天乃を一瞥し、ごくりと喉が鳴ったのが聞こえて音源へと目を向けると、風もまた自分を見ていることに気付く。同時に息を呑んだのだ。純白でありながら紅一点を頂に染めた魅惑の果実。アダムとイヴが食した禁断の果実など、比較するに値しない。手で味わうか舌で味わうか……どちらをしても良いのだが、どちらも行うという選択肢はどこにも無かった。感覚を二分するなど勿体ないと思う。

「んっ……はぁっ……はぁっ」

「……左、あたし」

先に動いたのは風だった。呼吸のたびに小さく揺れる乳房があまりにも美しくて、さわり心地が良さそうで……しかし、利き手ではない左手で触れることで傷をつけることを恐れて、舌先でチロリと乳頭を舐める。

「っ！」

芯の通った抵抗感は根元からぐにゅりと折れて舌を受け流し、すぐにまたそり立つ。その誇らしげな姿に風は満足気に笑みを零して湿度の高い口を開くと、薄桃色の領域全てをその口腔に頬張る。ほのかに汗ばんだ天乃の味が口いっぱいに広がっていく。

（なにこれ、美味しい……言っちゃ悪いけど、あたしの大好物に引けを取らないわ）

「っぁっ！」

「んふ……んにゅ」

よくよくお餅などとたとえられる乳房の感触は想像を遥かに超えた食感だった。舌の奥にまで届く隆起した乳頭の硬さ、唇に擦られ、歯に触れるたわわな肉質はほんの少しの圧迫感に反発して口から溢れ出ていき、ちゅぷりといやらしい音を弾けさせながら逃れて震え、艶かしい光沢を放つ。その僅かな所作でさえ、風は自分の下腹部が強く疼くのを感じて、苦笑する。想像で自慰に浸った経験が馬鹿らしくて堪らなかったのだ。あんな薄味な想像しかできなかった自分の不甲斐なさを痛感したのだ。そして、考える。どうすれば逃すことなく、余すことなく味わえるのか。そして――至る。赤子ほど乳房において天才的な発想を持つ存在は居ないと。風がある意味での原点回帰に達する直前、樹はなぜ行為の前に深爪するほど切らなかったのかと……自分自身を責めようとしてすぐにそれを払い除ける。今は目の前の柔らかな人肌の宝玉に集中すべきだと、思ったのだ。誰かの話を聞くときに上の空であることは失礼だ。愛する人との性的行為の最中にほかのことを考えるのも失礼だ。樹は右手で優しく天乃の乳房に触れる。手先ではなく、指の腹で掠めるように。

「んっ……っ……」

くすぐったさと心地よさの交わった天乃の吐息が零れるその一方、樹は自分への快楽など感じさせていないにも関わらず昂ぶっていくのを感じて、息を吐く。熱っぽい吐息だった、欲情しているのが分かるねっとりとした息。空腹を示すのと同じように溢れた唾液を飲み込んで渇いていない喉をさらに潤わせていく。今なら、どんな歌でも歌えそうだ。

「はぁ……はぁ……」

「変な事、言っても良いですか？」

「ん……な、に……？」

「今の久遠先輩、呼吸してるだけでもエッチです」

「んっ！ ふ……ぁっ」

天乃は驚いて目を見開き、答えようと開いた口にすぐさま手を宛がう。樹が天乃が話そうとしていようといまいと関係なく行為を続けるために、下手に口を開けば声が響いてしまう。それを夏凛達が覚悟しているとは言え、出来る限り恥ずかしい声など聞かせたくないし聞かれたくないのが本心だった。

（我慢してるからこそ声を出させたい……なんて……胸が痛くなる）
肌理細かい肌は掠めるだけでも指を追いかけては滑るように落ちていき、それがあまりにも心地よくてゾクゾクとしてぷるんっと震える乳房にドキドキする。その痛みだ。天乃のかわいらしさ、美しさ、淫らさ、色っぽさ。熱っぽい吐息、蠱惑的な汗の煌めき、自分が上位にいるという形容しがたい心高ぶらせる状況。人前の緊張感に似た鼓動の速さ、だがまるで違う亜種の動悸の激しさ。大衆を前にした羞恥心による表情の変化はなく、悦びゆえの笑みがこぼれ落ちそうになる。次から次へと笑顔がはがれて笑顔が生れる。真に愛し合う者同士ならば、性行為とは幸福の永久機関。もっと、もっと……と、脳が催促する。口の中が水浸しになって端から涎が滴っていくが、樹は飲んでも飲んでも溢れてくるそれを止めるのは諦めて、手を伸ばす。東郷ほどの大きさは無いが樹の手には余るほどの豊満さを持つ天乃の乳房、その側面を撫でるようにしながら手を滑らせ、体に密着する汗がたまりそうな部分を持ち上げて、舌を這わせる。
「んっ……んぅっ！」
「んちゅ……じゅるっ」
「んっんんっ……っ！」
「ふー……んちゅ……」
「んんぅぅ！」
天乃は自分の口に手をあてたまま声を押し殺す。この病室にみんなが居るのだ。もう経験済み―園子はキスまでだが―とはいえ、やはり遠慮すべき点だ。しかし、風は容赦なく赤子のように乳房に吸い付き乳頭を甘く噛んでちゅるちゅると啜り、樹は胸を傷つけないようにと繊細な手つきで揉みながら普段は表に出てこない部分に舌を通していく。
（なんなの……なんのっ）
そのせいで、いつ声が漏れてもおかしくは無かった。むしろ、昂ぶりによる体の熱、その吐息は嬌声交じりの甘いもので……すでに溢れ欠けていた。その押し殺している姿はより愛らしく、淫らで、姉妹の情欲をそそり、淫火して過熱する。
「んっ、んんぅ！ んーっ！」
下腹部の疼きが際限なく強くなって、とろり……とろり……と、蜜が漏れ出してお尻にまで広がっていくのを感じながら、天乃の体は震える。二人の似たようで違う刺激は二分された神経では受け止めきれず、溢れた快感が絶え間なく襲い、休息の間などない。そして、樹までもが母乳を求める子のようにかぶりついた瞬間、重複した快感は神経を弾けさせて一瞬で脳に到達する。
「んんんっ！」
粗相をしてしまったかのような感覚が淫口から迸ったのを感じながら、天乃は心地よさに震え、放心する。けれど体の熱は収まらない、そもそもこれはまだ序の口だ。下着を脱がしきっていない。下腹部への接触だってまだ本格的ではない。なのに、もう強い快感を与えられてしまったのだ。

会館に打ち震えて潤んだ瞳を前へと向ける。性欲に魅入られた猛獣はまだ何も満足などしていないといわんばかりに目を輝かせて、鼻を鳴らしていた。当然だ、まだ序の口なのだから。二人は全く肉欲を満たせてなどいないのだから。

（駄目……なんか、もう……壊されそう）

その言葉の意味がどのようなものかまでは解らなかったが、天乃は何となくそう感じたのだ。性的な行為に没頭してしまうようになるのではないか。それを求め続けるようなエッチな自分になってしまうのではないかと。

「……えっちな匂い」

「啜ってみる？」

二人は天乃のそんな考えなど露知らずごくりと喉を鳴らす。ショーツには目に見えて分かるシミが広がっており、淫猥な香りも溢れて止まない。

「やっ……ぁ……」

天乃が小さな声を漏らす。だが、風は天乃のショーツを摘まむとゆっくりと引き下げていく。天乃の羞恥心を逆なでするように時間をかけて、天乃の抵抗する様な手に触れられても止まらない力で。天乃と風は同年代だが、風にとって今の天乃は愛らしい小動物のような存在にしか見えなかった。小さいながらに引き締まった体に豊満なバスト、普段はりりしさを兼ね備えた声も濡れそぼって蕩けるような甘さで、蹂躙したいなどとは思わないし支配したいとも思わない。ただ、ただ……どこまでも愛し尽くしたいと、味わいたいと身も心も渇望していた。

「っ……やっ」

秘目られた聖域の辺りまで下がっていくと、熟成した淫香が辺り一面に強く広がり、ショーツに引っ張られていく淫らな水音がぬちゅ……っと、恥ずかしげもなく音を立てる。

（まだ全然なんだ……）

妊娠したおかげで、天乃の淫らな部分には本当に微妙に陰毛が生れ始めているのが見えて、風は思わず感嘆の声を上げた。十五歳であり、切ったり剃ったりと整えていないはず―その必要性がまだない―なのに産毛と変わらない状態なのは少し心配ではあるが……そう言うこともあるだろうと風は思う。樹だってまだだ。最も、中学一年生の樹と中学三年生の天乃を比べるということ自体間違っている気はするのだが。

「あ、あまり見ないで……するならして良いからっ」

「それは、その……ごくっ」

「樹っ」

「不可抗力ですっ」

好物を眼前に並べられて喉を鳴らさずにいられようか――いや、いられない。それが空腹であるのならば、なおさら。樹は天乃の股の付け根に右手を宛がうと、ゆっくりと顔を近づけていく。クンニリングスと呼ばれる性行為の一種だったと樹は頭の中で図を思い浮かべる。当然ながら樹はこの行為の経験はない。文章やその絵などを見ながらこういうもの

だと学んだだけのこと。大幅に規制されたアダルトな動画は何の参考にも役にも立たなかった。むしろもどかしくさえ感じた。どうなっているんだろう、どうやっているんだろう。救われなかった好奇心はより強くその行為をしてみたいと思ってしまった。だから、どのようにするのかは教科書通りのつまらないものになりかねない……だが、樹は止まろうとはせず、短く舌を伸ばして割れ目の縁をぺろりと舐めた

「っ……ほ、ほんとに……んっ」

「っは……んっ、ぁ……」

「んぅっ……き、汚いのにっ」

「ん……そんなこと、ないです」

ちょっぴりと塩味を感じるものだったが汚いとは思わなかったし、味覚を通じて体に広がっていくその感覚は普通では得難い幸福感に満ちていると樹は思った。特殊な行為、特殊な感覚だという自覚はあるが、好きなのだから仕方がない。したいと思ってしまったのだから仕方がない

「んちゅ……」

「んっ！」

秘境に隠された秘宝、女の子が誰でも敏感に感じる陰核の部分に唇で吸い付き、舌先でチロリ、チロリと舐める。歯を立てないように、傷つけないように唇で優しく吸いながら扱き、舌先で少しだけ強い刺激を刷り込む。びくん、ぴくんっとそのたびに天乃の体が震えて声が漏れて、さらなる強烈な刺激を欲して性欲を頂く口は涎を垂らし、樹の喉を潤していく。じゅる……じゅる……わざとらしく音を立てられて天乃の羞恥心は暴発寸前にまで持ち上げられていた。

「んっんぅ……ぁっ……んっ」

口を押える手がびちゃびちゃに濡れていく。声を我慢することはもうできなくて、蓋をしているだけの状態だった。それを分かっているはずなのに、風はにやりと笑って天乃の手を掴んで引き剥がすと、樹が下腹部で行っているように、天乃の口周りをぺろりと舐めて、唇を重ねる。ぬるりとした舌が絡みつき、唾液を押し付けて本来の質感を取り戻したかと思えば、天乃の舌を抱え込んでざらりと引きずり奪う。唇が重なったまま、風の喉がごくりと動き、また天乃の口腔が蹂躙されていく。でも、嫌ではなかった。息苦しさはあるが、辛くはなかった。苦しくもなかった。解けていくのを、感じた。

（また……もう……）

抑えられた手が口の代わりに震える。伝い落ちて天乃の口いっぱいに広がっていく風の心を飲み下して、自由な手を、風の頬にあてがい、キスを求める。

「ん……」

「んふ……んっ、っ！」

樹からの刺激に、意に反して体が震える。声が漏れる。そのすべてを二人が受け止める。今までは指でされる事しかなかった下腹部の新しい刺激に体はすぐになじんでいく。性行

為だと、心地いいことだと、快感を与えてくれる行為だと身勝手に記憶して、受け入れていく。
「っふ……」
「ぁっやっ……風、離……っあぁぁぁぁぁっ」
風が長いキスを終えて離れた途端、敏感なところをちゅるりと甘噛みされ、天乃は嬌声を上げて、身体をわずかに痙攣させる。同時に樹の小さな悲鳴が上がったが、気にする余裕はなかった。二回目の果ては体力的に響いて呼吸はとても荒く、じわじわと残る快感の余韻に体は怯えて身構える
「わわっ……ぁ……おいしい」
「いや舐めてないで拭きなさいって」
「はーい。お姉ちゃん交代だね」
予め用意されていたタオルを受け取った樹は一瞬残念そうな表情を浮かべて、顔を拭う。逝った天乃の快感を浴びた汚れはある意味樹にとって誇らしく、身に纏う淫靡な匂いはあまりにも心地よかった。
（自分のとは違う……この匂い、好きだなぁ……）
顔を拭いたタオルをそのまま顔に押し当てて、樹は何げなく自分の下腹部に触れようとして、留まる。今は左手が使えないのだ。相手が目の前にいるのに自慰行為に浸るというのは寂しいが、それ以上に気持ち良くなれないことが少し、残念で。
「久遠先輩……」
「んっ」
樹は間髪入れずに天乃の唇を奪っていく。姉と恋人の交じり合った特別な味わい、潤って熱っぽい口腔は心地よく、溶け合っていく。舌を絡めて互いに求め合うディープキス。深く心地いい感覚は体の奥底にまで染みわたっていき、焦らされてばかりの下腹部を淫らに湿らせて……
「っぁ……！」
樹は自分の手で、擦った。普段する自慰とは比べ物にならないような強い刺激。自分で弄っているのに自分でしているのではないような凶悪な快感が逆っていくのを感じて、樹は秘められた部分から湧き水のように力が抜けたのを感じて、息を吐く。寝間着や下着がぐっしょりと濡れたことなど気にせず、感じた快楽の余韻に浸る。
「ぁ……は……んっ」
自分が自分ではないような声、鏡を見たら他人が移るのではないかと思いながら、樹は天乃とのキスを再開し、胸を愛撫する。じっとりと汗ばんでいるおかげか手に張り付く天乃の肌の感触はより鮮明で柔らかで、風の刺激によって吹き出る嬌声が喉を震わせる。そのたびに身体が動いて、ショーツが敏感なままの下腹部を掠めていく。その刺激がまた、心地よかった。
（……満足そうな顔しちゃって）

そんな樹をちらりと見た風はそんなことを思いながら、嬉しそうに笑みを浮かべる。樹の想いを知っていたから、どれだけ求めていたのかを知っていたから。それがかなったことを喜ぶのは当たり前で。

（あたしも、そろそろ本腰入れますか）

とはいえ、樹のようにクンニリングスの知識があるわけではない。樹が実演して見せたことの見様見真似だ。かといって、キスをしながらそのすべてを見れたわけでもない風は、よりにもよって――舌を挿入した

「っんんんん！？」

指よりも太く肉厚で、形が変わりやすく、ぬるりとしていてざらつきもある舌の挿入は、男性器の挿入経験がある天乃にも違和感があった。しかし、心地よかった。横長に押し広げられたかと思えば、上下に蠢き膣壁を掠めて削られ、ぬるぬるとした陰部の周りには熱っぽい吐息が吹きかけられ、挿入された舌は縦横無尽に蹂躙を始める

「んっ、ぁっ、ちょ……んんっ！」

二度の最大級の快感によって敏感になり切っていた天乃はたったそれだけで限界に達して放心し、吹き出たすべては風の顔や口に降りかかる。初めての行為で天乃を感じさせてあげられた達成感は汚されたことよりも強く、何より鼻腔をくすぐる女の匂いが心躍らせた。もっとしたい、もっと味わいたい。天乃が放心して普段見せないような姿を見せていても、風の情欲はまだまだ満ち足りていなかった。それでも、快感を逆らせてしまいかねないほどに高ぶっているのを感じていた

（直接してないのに……あたし……ちょっとやばいかも）

天乃が淫らに乱れている姿だけで、快感を覚える。夢を見てサディストな部分があるのではと薄々感じていた風は、それが本当にあるのだと確信して……自分が恍惚とした笑みを浮かべていることに気づく。もちろん、優しさと尊重を絶対に損なわない範囲でだが。

「天乃、まだまだ終わらないわよ」

「ぇ……はぁ……はっ……んっ……んんっ！」

「まだ、あたしはイってない」

「んっ、ぁっ、あぁっ……はぁっはぁっ……やっ、少し休……っあああ！」

指の挿入、敏感な突起の愛撫、語りかけながらも続いた快感の濁流に、天乃の体は容易に限界を迎えてベッドのシーツを汚す。その姿はあまりにも淫らで、艶めかしくて。消費するたびに性的欲求を補填させていく。

「……私も、もっともっとしたいです」

終わりはない。終わりがあるとすればそれは時間が来るか体力の限界にまで達するかだ。火照り切った体、じんじんとする下腹部、天乃は二人の猛獣に囲まれながら自分の淫らな部分を感じて息を呑む。

（もう……限界なんだけど……）

色々言いたいことはあったし、出来るならばやめて欲しいと求めたかったが盛りきった二

人を止めることは出来ないだろうし、中途半端に許可して蓋をすればまた次が恐ろしいことになるだけだろう。ここまで来た時点で、彼女たちに欲望の蓋を開かせてしまった時点でもう受け止める以外の道は天乃にはなかった……もっとも、天乃は受け止めるというよりも逆らせる側なのだが。

「んちゅ……んっ」

「ちゅ……じゅるっ」

「んっ……優しく……してってば……」

ゆえに、天乃はそう言うだけで精いっぱいだった。風と樹はそんな天乃の要求に満面の笑みで頷いて「出来る限り」と口を揃えて嘯く。徹底的に貪り尽くそうという沸き立つ欲望が透けて見える瞳、歪む唇、滴る蜜、漂う淫香、運命さながらの免れ得ない現実がそこにはあった。

「お願い……ね？」

それでもどこか昂ぶりを感じる自分に不安を感じながら、天乃は念押しして――身を委ねた

～END～